

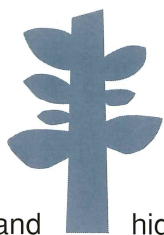
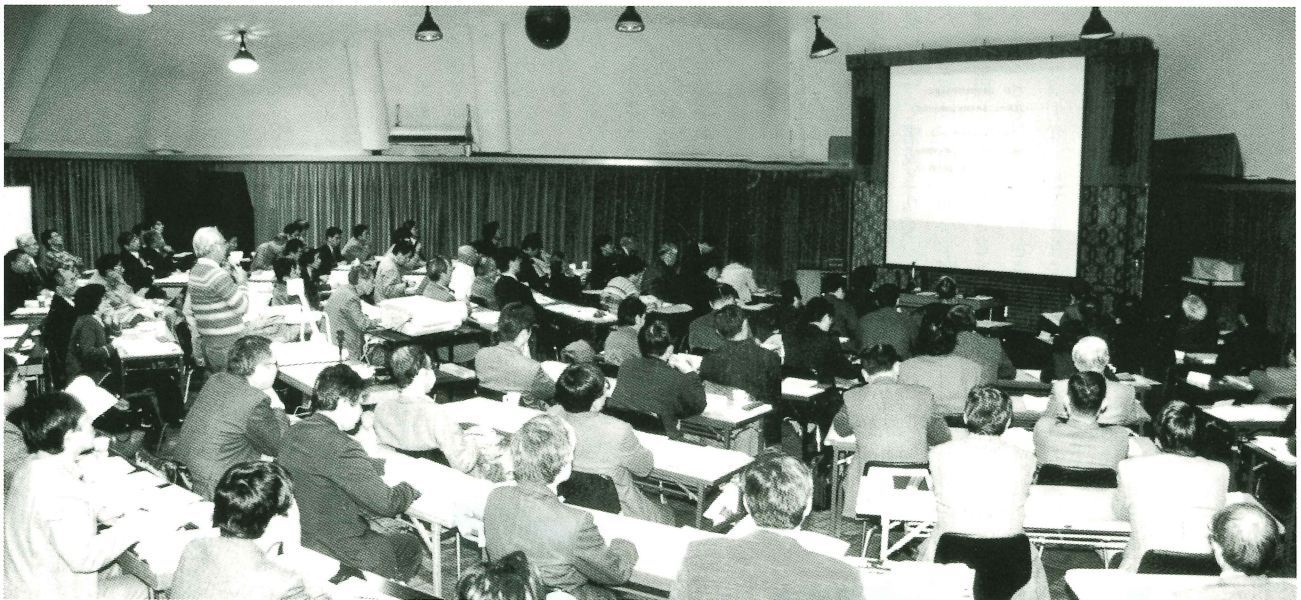
SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス

No.153

1998.10,11,12

■ わが大学					
東京薬科大学 学長 森 陽	／ 2	■ 法人ニュース	／ 9		
■ 教育プログラム報告		■ ひとこと	／ 9		
1. 第177回大学共同セミナー		■ 花ごよみ	／ 9		
地球市民になろうpart2		■ 千人会			
——戦争と平和について考える——	／ 3	ご入会ありがとうございました	／ 10		
2. 第16回大学院共同セミナー		会費ありがとうございました	／ 10		
カルチュラル・スタディーズ	／ 4	千人会のおたよりから	／ 10・11・12		
3. 第25回国際学生セミナー		追悼	／ 12		
アジアの危機とその衝撃		■ ありがとうございました	／ 11		
——われわれはどう対処すべきか——	／ 5	■ 千人会——大学セミナー・ハウス維持会のご案内	／ 12		
4. 第178回大学共同セミナー		■ 寄贈図書	／ 12		
科学と社会、そして技術——環境・生命・物質——	／ 5	■ 業務通信			
5. 第1回土曜セミナー		わたしたちの合宿①②	／ 13・14		
新しい映画史を考える——知られざるムルナウ——	／ 6	私の国際交流	／ 14		
■ トピック		■ 利用状況	／ 15		
戦争と人間 小島 清文	／ 7・8	■ 開催予告・出版書籍案内・ホームページのご案内	／ 15・16		
		■ 館長室から	／ 16		



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
 INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.
 ホームページ <http://www.mesh.ne.jp/iush/>

東京薬科大学

学長 森 陽



わが東京薬科大学は、間もなく創立120周年を迎える。この長い間医薬品を通じて国民の健康と福祉に寄与する薬剤師の育成を行ってきた。一九九四年さらに生命科学とバイオテクノロジーという技術の開発とその実践を担う人材育成を目指す、薬学と表裏一体の関係にある我が国初の生命科学部を新たに創設した。両学部共、人類の福祉への基本的志向であるヒューマニズムの原点を常に探りつつ視野の広い有能な人材を育てる大学でありたいと努力を続けている。

大学は、少子化による18才人口の減少してゆぐ中、本学が高いレベルの教育・研究を維持してゆくために、法人および両学部の教授会は如何にあるべきかを自ら問う必要がある。その上、薬学部は薬剤師をめぐる環境が大きく変化してきたので、その対応に迫られている。

近年、ライフサイエンスの飛躍的發展によって、病気の原因や生体の恒常性を維持するメカニズムが次第に解明され、様々な内因性生理活性物質や生命現象にもっとも基本的な遺伝子に関係する物質までが薬物治療で用いられている。伝統的な、薬を創製する分野も、次第に複雑かつ精緻となり、ますます興味ある薬学領域を形作っている。

一方、超高齢化社会を間近にして、薬の長期間の服用、ほかの薬との併用による薬剤の相互作用や重複した服薬などを避けたり、予期しない作用と副作用を防いで、有効にかつ安全に薬を使うことに、社会からの強い要求がある。これに応えた、一人一人の患者にもっとも適した薬の選択や、服薬指導などの患者情報管理の技術は、医療薬学の中心的な分野として育ちつつあり、21世紀には薬剤師のもっとも基本的な役割と仕事になると、多くの人々から期待されている。

このような背景から薬学6年制問題、学問的基礎へ立脚した医療薬学の強化充実が大きな課題で

ある。そのため薬学部教授会は薬学教育再構築の一環として基礎薬学講座の医療薬学系講座への転換をはかり、医療薬学、基礎薬学、衛生薬学のバランスのとれた講座再編成を実施しつつある。

一九六〇年代は、米国で勃興したクリニカルファーマシーの重要性をいち早く認識した本学は、医療薬学系の2講座を新設すると共にUSCとUCSFから毎年、客員教授を招き医療への教育と研究の足がかりを築いた。一九九六年、医療薬学研究棟を建設して医療薬学専攻の院生の教育研究の場を作った。

学部の教育では、一般教育科目の見直しが進められ、また、薬剤師国家試験のガイドラインに沿った大幅な変更、さらに病院薬剤部や薬局での一ヶ月の実習を実現、充実させようと実習カリキュラムの改訂が進行中である。そのため医療機関をもたない本学が、院生および学部学生のための実務実習の場を確保するかは大きな問題である。

既に、東京医科大学とは姉妹校の提携を結び、研究会や共同研究が実施されている。日本医科大学、杏林大学医学部、慈恵医科大学、聖マリアンナ医科大学と法人間提携を結んでいる。

一方、生命科学部は、特に生命を分子、細胞レベルでの究明を目指す分子生命科学科と、環境に焦点を合わせて生命との関連を掘り下げる環境生命科学科の二学科によって構成されている。新しい可能性に満ちた本学部は、国際的な学問に必須な英語と情報処理の手段としてのコンピュータに強い人材を育成することを目指して特色ある教育を行なっており、昨年3月第一回卒業生を送り出した。さらに4月から、大学院研究科（生命科学専攻）を設置、本年博士課程設置を申請する。

一方、研究面でも一九九七年文部省の私大に対する大型助成事業であるハイテクリサーチセンターの厳しい選考に合格した本学は、ドラッグラシ

ヨナル研究開発センターを建設し、バイオテクノロジーを目指す研究グループは、各プロジェクトに分かれて研究が始められている。これは、本学の研究水準を著しく向上させ、教育面でも大きな成果をもたらすものと期待している。ちなみに、平成10年度も既に文部省の科学研究費、受託研究費、指定寄付さらに日本私立大学振興・共済事業団による助成金などを含めると3億5千万円に達している。本学が21世紀に大きな飛躍を遂げるために、薬学部と生命科学部が調和を保ちつつ、異なった視点からよい教育・研究が進展できるように環境作りに努力してゆかねばならない。



地球市民に なろう part 2

戦争と平和について考える

第17回大学共同セミナー

98年10月9日～11日

▼講演「戦争と人間」

不戦兵士の会

小島清文

津田塾大学学芸学部教授

ダグラス・ラミス

インドネシア民主化支援ネットワーク／上

智大学院博士後期課程 佐伯奈津子

▼セクション演習

A. 戦争と平和の国際政治

——もう戦争は起こらないのか——

東北大学法学部教授

大西 仁

B. 戦争と環境破壊「ヒューマン・セキュリティ

テイ」を求めて

フェリス女学院大学国際交流学部教授

白井久和

C. 戦争と性暴力

——女たちにとっての戦争——

恵泉女学院大学人文学部教授

内海愛子

D. 民族紛争と民族共存

早稲田大学政治経済学部教授

伊東孝之

E. 暴力から平和への心理学

大東文化大学文学部講師

杉田明宏

【参加状況】17校68名(男39・女29)

東北(27)、大東文化(5)、早稲田(4)、立教(3)、千葉・中央各2)、埼玉・東京・東京外国語・一橋・神戸・名古屋・静岡県立・杏林・慶應義塾・国際基督教・上智・東京薬科・日本女子・フェリス女学院・恵泉女学院・和光・八戸・文教・立正・放送(各1)、その他(5)

日本平和学会が中心となって企画した「地球市民になろう」part 2が、戦争と平和をテーマに2泊3日で行なわれた。セミナーは、ゲスト講演と、少人数で議論するセクション演習とを柱に行なわれた。活発な意見交換や質疑応答が行なわれ、充実したセミナーとなった。全体会の詳細については、恵泉女学院大学の内海愛子教授がご寄稿くださったのでご覧いただきたい。

第2回「地球市民になろう」をテーマとする大学共同セミナーは、5つの分科会担当の5人の教員と3人のゲストスピーカーを交えて、2泊3日にわたり開かれた。私は「戦争と性暴力」の分科会を担当したが、ここでは全体会についてふれておきたい。

参加者全員が聴講できた講演には、70歳をこえる小島清文氏の戦争体験をふまえた戦後の不戦活動、ダグラス・ラミス氏(津田塾大学教員)のアメリカにおけるベトナム反戦活動と現在の「日米ガイドライン」反対運動、上智大学大学院生で「インドネシア民主化支援ネットワーク」の事務局長でもある佐伯奈津子さんの現在進行中の「イリヤン・ジャヤ」の戦いと、3人に過去と現在にま



たがり未来につながる反戦平和の問題を具体的に語っていただいた。

小島清文さんは、「戦艦大和」の通信士だったが、フィリピンで自らの意思で部下を連れて米軍に投降した希有な体験をもつ。その後、ハワイの捕虜収容所で終戦運動に参加し、日本人に投降を呼びかけるピラをつくらせている。あの時代になぜ、小島さんが他の人と違う戦争観をもつことができたのか、通信士として情報をつかんでいたこと、新聞記者の親の影響でかなりリベラルな考え方をもてたことなどを話された。そして、小島さんは悲惨な戦場にあつて自分が命を賭けて戦っている「国家とは何か」を考え続けたという。

押しつけられた知識に凝り固まるのではなく、現実をみつめてその中でぎりぎり生きる道を探し続けた結果、小島さんは当時の常識——「生きて虜囚の辱めを受けず」との捕虜になることを戒めた教え——と上官の命令に抗して、自らの判断と知識と勇気で自分と部下の命を救ったのである。

不法な命令への「不服従」の勇氣、これが求められる時代が来そうな予感がある時、大学生たちは小島さんの「遺言」ともいえるべき話をどう聞いたのだろうか(なお、小島さんはこの後、体調を崩し入院、年末に胃ガンのための胃の全摘出手術をうけ、さらに今年も手術を予定されている。おそらく、多くの学生を前に話すのはこのセミナー講演が最後になったと思われ)。

ダグラス・ラミス氏は、アメリカの海兵隊員の経験をもつ。アメリカがなぜベトナムに介入したのかはすでに多くの研究が出ているが、ラミス氏の話は、アメリカでおこり、全世界を巻き込んだベトナム反戦運動の具体的な体験談であった。ジョン・バエズの反戦歌は私たち教員たちにとってはなつかしいものであるが、学生たちには「プラトーン」や「7月4日に生まれて」あるいはテレビドキュメンタリー「シカゴ8たち」の中でしか知らない運動である。

エスカレートするアメリカ軍のベトナム介入に、アメリカで反戦運動がおこった。その

運動の中にいたラミス氏はなまなましかった。また、日本とアメリカの若者たちがこの時ほど手を結びあつたこともなかった。脱走兵を支援する運動もあつた。国家の命令に不服従の意思を示して脱走する米兵たち、それを支援しかくまう日本人、「不服従」の運動は国境を越えたのである。では、「日米ガイドライン」に私たちはどのような運動をすべきか、議論すべき緊急の課題である。

32年におよぶスハルト体制が崩壊したインドネシアはいま混沌としている。軍事独裁政権下で押さえ込まれてきたジャワ島外の地域、特に、東チモールのようにインドネシア軍に不法占領されていた地域では、独立あるいは自治を求める動きが強くなっている。イリヤン・ジャヤ(西パプア・ニューギニア)もその一つである。佐伯さんは98年8月にここを訪れた。地元のNGOの人びとと意見交換をし、独立を求める人々が虐殺された現場に足を運んでいる。西洋植民者による不自然な国境の確定とそれを引き継いだインドネシアの占領、地元住民の意思を無視したパプア・ニューギニアの分断に対して、独立を求めて戦っている人々がいる。日本では見えない先住民たちの独立を求める運動を紹介することで、アジアについてもくくり出さないうえ、多様で複雑なアジアの現状が見えてきたのではないのか。

25歳という若い佐伯さんは、インターネットを駆使して懸命に政権と戦っている人々の情報を日本に流し続けている。彼女の主催するEメールやホームページにはインドネシアのNGOやマスコミには載らない貴重な情報が満載されている。新しいアジアとの連帯運動のあり方を彼女はその行動で示してくれたと思う。

三世代にわたる国籍も性も違う3人の講演は、単なる知識ではなく人間としての生き方についての多くの示唆を与えてくれたのではないだろうか。彼らが投げたボールをどう受けとめるのか、参加者一人ひとり自分が答えを出し、今後の生き方につなげていければと思う。(内海 愛子)

カルチュラル・スタディーズ cultural studies

第16回大学院共同セミナー

'98年10月23日(土) 25日(日)

【講義】

1. 文学研究から文化研究へ
東京大学教養学部教授 小森 陽一
2. カニバリズムと表象の政治学
——「アメリカ」の起源——
東京都立大学人文学部助教授 本橋 哲也
3. メディアを語る言説
——両大戦期における新聞学の誕生——
東京大学社会情報研究所助教授 吉見 俊哉
4. 視覚的表象とジェンダー
学習院大学文学部教授 千野 香織
5. 歴史意識の場所
日本女子大学人間社会学部教授 成田 龍一

【運営委員】

東京大学教養学部教授 小森 陽一
東京大学社会情報研究所助教授 吉見 俊哉

【参加状況】 25校、64名男子32名・女子32名

東京(12)、早稲田(7)、慶應義塾(6)、茨城・千葉・一橋・大阪・神戸・学習院・法政・立教(各2)、筑波・お茶の水女子・東京芸術・青山学院・桜美林・成蹊・中央・津田塾・日本・武蔵・明治学院・関西・東京薬科(各1)、ハーバード(1)、その他(9)

◆ '96年7月の「ゲーム理論の新しい展開」以来、2年ぶりの大学院共同セミナーは、文系・理系がほぼ同数の参加で開催された。

カルチュラル・スタディーズは、講師であり運営委員でもある小森陽一氏の言葉をお借りすると、「近代国民国家の、それぞれの歴史過程の中で、国家間の政治的・経済的・軍事的な力関係に規定されながら生み出された、広範な知と文化の領域を、発信する側だけでなく、受け手をめぐる流通経路や消費行為をも含めて分析的に検証し、そこに現象するイデオロギーを批判していく実践の総体」である。初日の自己紹介の時間では、何人かの参加者から、興味や問題意識が所属する大学の行なっている研究内容の枠内に収まらないため、このセミナーで得られ

た考えや視点を自らの研究に活かしたいといった動機が述べられた。「カルチュラル・スタディーズ」は、決してまとまった理論体系ではない。まとまった理論体系でないからこそ、既成の理論体系に飽き足らない大学院生たちには魅力と感じられたようだ。

セミナーは3日間にわたり、全て全体会形式の講義と討論として進められた。小森陽一氏は「文学研究から文化研究へ」というテーマで、夏目漱石の『明暗』における結婚をめぐる性差を例として、言葉がその時代の多様なコンテクストの中での力関係によって意味を現象させることを説明された。

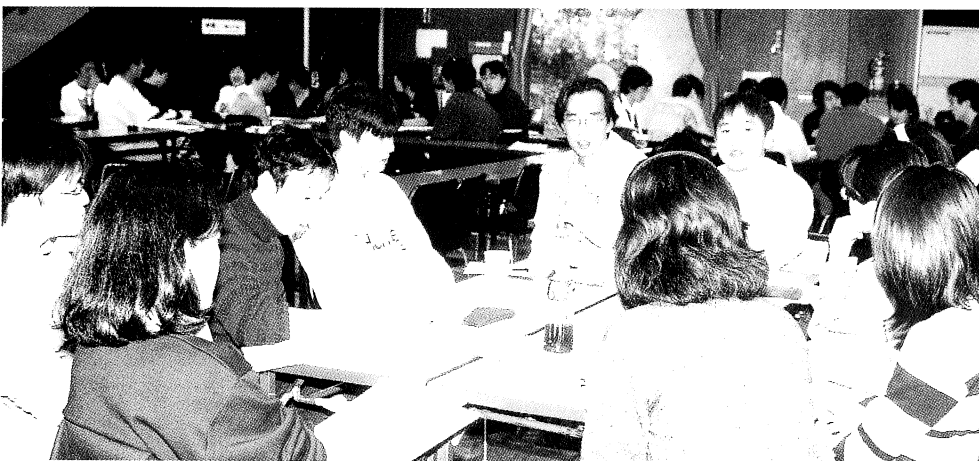
本橋哲也氏は「カルバリズムと表象の政治学—アメリカの起源—と題し、表象とは、既に存在する意味の伝達以上の意味生産の行為であり、それゆえ発話の場の権力関係に規定されることを、コンロンブスによって発見された「カニバル」という記号の変容を例に説明された。

吉見俊哉氏は「メディアを語る言説—両大戦期における新聞学の誕生—」と題し、日本のマスコミ研究における自らの起源の忘却を指摘され、メディアを語る自らの場所（東京大学社会情報研究所）の、言説的制度的な起源を問われた。

千野香織氏は「視覚的表象とジェンダー」と題し、「ニュー・アート・ヒストリー」の動きを紹介されつつ、美術館や美術史学の領域における、表象に関するジェンダー問題を述べられた。

うテーマで、歴史意識の形成される場所を手がかりに、「歴史」と「歴史学」の再定義を試みられた。

講義の合間の質疑応答やその後の討論は、専門性の高さを伺わせる真剣で熱いもったものとなり、2泊3日のセミナーは時間の長さを感じさせない充実したものとなった。



アジアの危機と その衝撃

—われわれはどう対処すべきか—

第25回国際学生セミナー

98年11月20日～22日

▼講演

現代東アジアの文明的位相
国際日本文化研究センター教授

川勝平太

▼セクション演習

A. 南アジアの核危機

聖心女子大学文学部教授

関場誓子

B. グローバル化時代のアジア経済危機

明治学院大学国際学部教授

勝俣 誠

C. 東アジアの安全保障

日米中関係を中心に

滝田賢治

中央大学法学部教授

天児 慧

青山学院大学国際政治経済学部教授

宇佐美滋

D. 日本のアジア外交

日本大学国際関係学部教授

友田 錫

亜細亜大学アジア研究所教授

友田 錫

E. Asia in Transition and the Crisis of Systemic Collapse

一橋大学法学部教授

駒澤大学法学部教授

大芝 亮

首藤もと子

【参加状況】26校114名(男47・女67)

中央(17)、聖心女子(13)、日本(11)、一橋・慶應義塾・早稲田(各7)、桜美林(5)、法政(4)、東京・日本女子・明治学院(各3)、東京外国語・学習院・国際基督教・上智・立教(各2)、東北・筑波・青山学院・亜細亜・大妻女子・杏林・成蹊・高千穂商科・帝京・明治(各1)、その他(4)



急激な経済成長で世界から注目されてきたアジアは今、様々な面で危機に直面している。株式暴落や通貨下落などによる経済危機、インド・パキスタンの核実験強行、日米ガイドラインに象徴される安全保障問題などの問題が最近になって明らかに表面化してきた。今回の国際学生セミナーは、今まさに直面している「アジアの危機」について、その現状分析と未来への展望、そしてわれわれはこの危機にどう対処すべきかをテーマに行なわれた。

セミナーは、国際日本文化研究センター教授・川勝平太氏のゲスト講演、五つのセクションに分れて少人数で討論するセクション演習、参加者全員で議論する共通セッションというプログラムで行なわれた。

セクション演習では南アジアの核危機、グローバル化時代のアジア経済危機、東アジアの安全保障、日本のアジア外交、アジアの構造的危機をテーマに深夜まで

活発な議論が繰りひろげられた。

ゲスト講演では、川勝氏が地球を大小無数の島々が大海に浮かぶ「多島海」と捉え、海洋アジアからの新しい世界史像について説明された。その上で、これからの日本は富国徳のガーデン・アイランド(庭園の島)を目指し、世界に憧れられる文化を持つことが重要であると訴えられた。

共通セッションでは、各セクション演習での議論の報告と質疑応答、それを踏まえての参加者全員による討論が行なわれた。主にアジアの危機に対して日本は経済面、安全保障面で何をすべきかについて話し合われ、経済危機に対してそれぞれの国の事情を考慮した資金援助ができるようなAMF(アジア通貨基金)の実現に向けて積極的に働きかけてはどうかなどの意見も出された。

全プログラムの終了にあたって講師から参加者に、「事実確認を正確に積み上げて議論してほしい」、「もつと自分の足でオリジナルな情報をつかんでセミナーに参加してほしい」という叱咤激励のメールが送られた。

百名を超える参加者にも関わらず、今回のセミナーも日本人学生と留学生、講師と学生との学問的・人的交流が活発に行なわれ、非常に内容の濃いセミナーになった。セミナー終了後の参加者のアンケートの多くに、「時間が足りなかった」、「もつと議論したかった」と書かれていたことから、その熱気がうかがわれる。セミナーの詳細については、『国際学生セミナー報告書』(99年5月発行予定)をご覧ください。

科学と社会、 そして技術

—環境・生命・物質—

第178回大学共同セミナー

98年12月5日～6日

1. 地球環境問題を科学の側面から

東京工業大学理学部教授

市村禎二郎

2. 生命科学の立場から

東京大学名誉教授・三菱化学生命科学研究所顧問

今堀和友

3. これからの物質の人間の関わり

東京工業大学大学院理工学研究科教授

大橋裕二

4. 科学の視点から科学・技術・社会へ

東京工業大学大学院理工学研究科助教授

中島秀人

5. 科学・技術と社会をめぐる話題から

国際基督教大学教養学部教授

村上陽一郎

【参加状況】15校、37名男子25名・女子12名

東京工業・東京薬科(6)、筑波・早稲田(3)、慶應義塾・国際基督教(2)、横浜国立・拓殖・文教・東京工科・東京理

科・日本女子・明治・立命館(各1)、放送(1)、その他(1)

最近、ダイオキシンの、環境ホルモン、遺伝子操作等に、社会の厳しい目が注がれるようになってきている。近代の自然科学が達成してきた成果を次々に「現代社会で使える」ようにする科学技術の進展と、生活を豊かにし社会を変えてきた科学者・科学技術者の進路に落とし穴があった。現代になり環境破壊や放射能が地球規模で人々を脅かし、こうした社会問題を引き起こしている。

今回の第178回大学共同セミナーでは、文系・理系の各分野から様々な問題意識を持った参加者が集まり、1泊2日で熱心な議論が行なわれた。

講演では、市村植二郎氏から実験を交えながら、光化学スモッグ、酸性雨、オゾン層破壊、地球温暖化、環境ホルモン、ダイオキシンなど現在深刻な社会問題になっている様々な環境問題についての解説がなされた。さらに、これらの問題解決に向けて、科学の役割は今後どうあるべきか提起された。

今堀和友氏は哲学的論理を交えながら、生命とは何であるか、分子生物学は人類に何をもたらすのか、生と死との関係はどう考えるべきかなどについて論じられた。また、最近の遺伝子やクロソンの研究がヒトの生命に与える影響について、さらに科学者の実情などを報告された。

大橋裕二氏は20世紀の原子・分子の物質観において、純粋化することによって役割を見失われてきた微量成分(あるいは不純物)の役割についての研究をいか

に回復するか提起された。また、現在の科学が持つ問題点および現状の研究レベルについての興味深い具体的な報告のほか、錬金術についての説明をされた。

中島秀人氏はひとりの科学者の功績や人間像に触れながら、科学がもたらした多くの功績や歴史について説明をされ、また科学者の役割の重要性について解説をされた。

村上陽一郎氏は科学技術の発展の歴史をふまえながら、21世紀に向けて科学や技術が社会の中で進むべき道についての提言をされた。

終わりのディスカッションでは、社会人としてあるいは科学者として多くの参加者から様々な視点からの問題提起があり、活発な意見交換が行なわれて幕を閉じた。

新しい映画史を 考える

—知られざるムルナウ—

第1回土曜セミナー
98年12月19日

【講師】

埼玉大学教養学部助教授 小松 弘

【運営委員】 明治学院大学教授 宇波 彰

【参加状況】 23名(学生10名・社会人13名)

大学セミナー・ハウス初の試みである日帰りセミナー、「土曜セミナー」の第一回は、F・W・ムルナウ監督の一九九二年の作品「ファントム」の上映および講義・討論で開催された。

上映された「ファントム」は、今ではほとんど上映されることのない作品で、講師の小松弘氏所蔵の16ミリフィルムを特別公開していただいたものである。

小松氏によるムルナウの知られざる経歴や作品群の紹介のあと、映画上映が行なわれた。「ファントム」は無声映画であり、台詞はドイツ語字幕であるため、小松氏自らがこの講演のために邦訳された台詞を読み上げられた。

初回とあってか、参加者は比較的少なかったものの、熱心な質疑・応答が続き、予定の時間を一時間以上延長して終了した。

参加の方々による感想を以下に紹介しておく。

○多少時間が延びましたが、講師の熱意故であり、大変満足いくものでした。

○もちろんこの

「新しい映画史…」をシリーズで！ 次は「だれかな」。

○フィルムセンター(今日はフィルムセンターではヒッチコックをやっていた)にも行きたかったのですが、こっちに来てよかったです。

○また映画についてのセミナーをやってください。

○先生のレクチャーで使われる資料は、やはり受講者に配布するべきです。お金を取ってもかまいませんから。その方が理解は深まります(特に、今回は重要です)。

○貴重な映画を見られたのは収穫だった。一日たっぷりかけて一人の先生にこのように語っていただくのはいい企画だと思う。

○とにかく時間に余裕があるのがよい。時間にズレがあっても弾力的に運営されていてよかった。

○今後も「映像を読む」セミナーをやってほしい。



▲「ファントム」より

第177回大学共同セミナー講演より

戦争と人間

不戦兵士の会 小島清文

まず私が体験した一つのエピソードからお話したいと思います。それは今から五十数年前、私がフィリピンのルソン島で部下を引き連れて白旗を上げて投降し、ハワイへ送られたときのことです。「Yes, Sir, Lieutenant」(はい、中尉殿)、これが私の質問に対するアメリカの海軍少尉の答えでした。捕虜の私に対して、海軍少尉は踵で音を立て直立不動の姿勢をとって答えたのです。これには驚きました。これでは日本は負けるはずだと痛感したと同時に、こんな青年を生み出したアメリカはいったいどんな教育をしているのだろうかと思いました。

●暗号士からフィリピンの最前線へ

私は戦艦大和で暗号士官をしていましたが、レイテ開戦で日本の艦隊が全滅したため、その後フィリピンのルソン島クラーク基地の勤務を命ぜられました。ところが私が飛行場に着いたとたん、その飛行機に乗って海軍中將と高級参謀の将校たちがそそくさと台湾に逃げてしまったのです。米軍の上陸が近いと見て自分たちだけ逃げてしまおう。これが当時の最高指揮官のつた行動です。その時クラーク基地の周辺には陸軍が約二五、〇〇〇名、海軍が一五、〇〇〇名、飛行場などを整備する主に台湾人と朝鮮人が五、〇〇〇人、合計四五、〇〇〇人がいました。それが最後には一、二五〇人しか生き残りませんでした。

●病兵自決の衝撃

当時私が属していた海軍部隊の武器は三八銃という小銃だけでした。しかも一、二〇〇丁だけです。10人に一丁もありません。食糧の配給はほとんどありませんし、薬もありませんので病気になる人も治す方法がありません。私はその当時、司令部から第一線の陸戦隊長を命ぜられていました。行ってみると25人全員がマラリアにかかっています、よれよれの状態でした。しかも私が着任した翌日、米軍の迫撃砲で10人が戦死し、残ったのが15名です。数日して撤退命令が出ましたが、そこには小隊長は病気の兵隊を殺して退却しろという条件があったのです。残された病気の兵隊が敵の捕虜になるとこちらの状況が筒抜けになるから殺せということでした。私の小隊は全員病気でしたが、一人だけどうにも動けない兵隊がいました。その兵隊を置き去りにするか、私自身が銃殺するか二つに一つしか方法がありません。みなさんが小隊長だったらどうされますか。当時は軍の命令は絶対です。病兵を殺さなければ私が銃殺されます。私はずいぶんと考えました。その時、突然銃声が一発バーンと響きました。その動けない部下が自決したのです。三八銃を

喉に当て、足の親指で引き金を引き即死でした。見るとタバコケースの裏の白いところに「天皇陛下万歳」と「隊長の武運長久を祈る」と遺書が書いてありました。私はそれを見た瞬間、鉄槌で頭をブン殴られた気がしました。私が殺そうとした兵隊が、私の武運長久を祈り自決していった。本当に申し訳ないという気持ちでいっぱいでした。しかも遺書は家族に対して一言も書いていないのです。日本の兵隊は死ぬまで建前だけで生きている人間としてこんなに悲しいことはないと思います。それから先、私は何回も同じような場面に遭遇しましたが、その都度なげなしの食糧を分け与えて、元気になったらいよいよと言って兵隊をその場に残留して退却しました。ついてこれないことはわかっていますし、米軍の捕虜になるかもしれない。でもそのほうがいいと思ったのです。

●何のために戦争を続けているのか

我々が退却する山の尾根の一番奥に「三角高地」という小高い山があり、そこを玉砕の地にするから全員集合という命令が出ました。ところがそこまで行くと、三角高地にいたはずの13戦区は全滅していたのです。敵のラウドスピーカーから日本の兵隊に投降を呼びかけるアナウンスがありました。私の部下たちは「生きて虜囚の辱めを受けず」と怒っていました。私は全く別のことを考えていました。私は戦艦大和の暗号士官だったので、いろいろな状況を知っていました。そしてこの戦争は3月に終わるという確信を持っていましたので、今ここで無駄な死に方をしてしまうがなと思います。私は大学の卒論で日本の自動車工業の将来をテーマにしており、日本とアメリカの経済格差を知っていました。そこで、そういう面からも勝ち目はなと思っています。この戦争を続けているのだろうかという疑問がわいてきたのです。日本の軍隊はいつでも上官のための軍隊です。しかしその司令官は我々を第一戦区において、どんどん奥地へ逃げてしまおう。それにもかからず特攻命令だけは遠慮なく出してくるので、そういう問いに直面せざるを得ません。私は慶應出身で福沢諭吉の「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」という言葉が頭にありまして、天皇も人なら俺も人だから何も天皇のために死ぬことはないと思っていました。では国家のために死ぬのか。私はその時初めて国家とは何かを考えさせられました。戦争中によくそんなこと考えたと言われますが、これには理由があります。三角高地で日本軍が全滅してしまつたので、私が生き残った部下の生殺与奪の権を握ることになってしまつたからです。

●南シナ海をめざして

さてどうしようかと考えていると、一人が南シナ海へ出ましようと言いました。ほとんどの人が同じようなことを夢見たようです。私も夢だとわかってはいましたが、人間は土壇場に追い込まれると夢を見ないことには生きられません。生き残った部下と尾根に向かつて上がつていくと右も左も敵ばかりでした。一度戻って翌日出直し、尾根から6、7メートルくらいのところにある大きな石の陰に隠れました。すると奇跡としかいいようがないのですが、米兵が我々の方に降りて来ました。我々は息を潜めて見ましたが、約15名の米兵が我々の前で休憩をはじめました。話す内容も聞こえるくらいの距離です。私は一緒にいた勇ましい下士官の顔を見ました。その時、もし彼と私の目があつたならば、私は攻撃命令を出したと思います。ところが彼も私の方を見る余裕がなかった。それで私は冷静さを取り戻しました。ここで攻撃して米兵の一人や二人を殺しても向こうは十数人で武器を持っているからこちらが全滅することは間違いないと考えました。その時に私の脳裏に浮かんだのは、私の無事を祈った両親の顔です。それと同時に非常に不思議ですが、米兵の家族とおぼしき顔が浮かびました。どういふことか今でもわかりません。そして米兵の姿が消えるのを待ち、反対側に逃げました。幸運にも新たな米兵がくるまでの一瞬の際に遭遇して、西へ西へと歩き続けました。

●ジャングルでみた日本兵の惨状

それから投降するまでの約一ヶ月間は、食糧不足で悲惨な毎日でした。我々が突破したときに持っていた食糧はせいぜい五日分で、食糧がなくなつてからはパイヤの根や春菊に似た雑草で食いつないでいました。青ガエルやカタツムリなど動くものがあれば片っ端から手づかみで食べました。食糧がなくなつた時に日本兵がどう行動は、天皇陛下万歳と言つて自決するか山賊になるかどちらかです。弱い兵隊が来たら捕まえて食糧を奪う山賊を私は何度も目撃しました。それは強いものが勝つという生き地獄そのものです。日本兵同士を殺し合ひも日常茶飯事でした。そういうのを避けながら山の中をどんどん逃げていきました。その途中には崖があり、そこには滑り落ちた日本兵の死体が山のようにありました。崖下はまさに日本の兵隊が最後に行き着いた墓場だったのです。私はそういう人々たちを見ながら、この人々たちにも愛する家族がいるんだと思えました。兵士たちは何のために誰のために死ななければならぬのか、この人々たち



不戦兵士の会
小島 清文氏

を見殺しにしたのは誰か、誰がこの責任をとるのかと考
えました。こんな無惨な死を強要する国家権力、戦争指
導者たちに本当に腹が立ちました。もし生きて帰ること
ができたならば、戦死者に代わり、この惨状をどうして
も国民に伝えなければいけないとその時堅く心に誓った
のです。

その後体力が本当に衰えてきて1日に五〇メートル
歩くのがやっとになりました。まわりを見ると杖を突い
てあてもなく歩いている兵士がたくさんいます。それ
は迷える子羊のようでした。将校の言う通りに動く兵隊
が一番優秀であると言われていましたが、上の人がいな
くなると自分でどう判断していいのかわからなくなるの
です。自分で考え、判断し、その判断に基づいて行動す
る。そして自らの行動については自分で責任を負うとい
う思考様式、行動様式を日本人は教育されていなかった
のです。

●初めて見たルソン島の青空、そして投降

そうやって西へと進んで行くと、ようやく南シナ海が
キラキラ輝くのが見えて来ました。私どもは万歳と言っ
て喜んだのですが、すでに南シナ海は米軍が全部占領し
ていたのです。このとき私の隊は、途中に合流したも
のを含めて7名でした。そして主計隊30人と合流して行動
を共にしました。彼らは食糧を持っていましたが、主計
大尉は戦闘の指揮は取れません。したがって両方の部隊
が合体して隊長は主計大尉で、戦闘の指揮は中尉の私と
いう約束をしたのです。ところがその食糧も底をつき、
このままではまた明日何人が死ぬかと考えていた時、主
計大尉がポケットから小さな紙切れを出して私に「小島
中尉、あなたはサレンダーについてどう思うか」と言い
ました。サレンダーとは英語で投降するという意味です。
当時の日本軍の雰囲気ですから投降という日本語は使い
たくありません。そこで私は私の考えを全部話しました。
我々将校は捕虜になり投降すれば殺されるかもしれない
。しかしアメリカは文明国家でジュネーブ条約もある
から兵隊までは殺さないと思う。何よりこの戦争はもう
すぐ終わるに違いない。ならば一人でも二人でも若い人
が生き残って日本に帰らないと戦後日本を誰が立ち直ら
すことができるのか。一人でも多く若者を祖国に還すこ
とが将校としての責任じゃないかと私は懇々と説得しま
した。すると主計大尉は俺もそう思うと言いました。そ
の時、彼は明日の朝私から話をするといいました。翌朝
全員整列したところで主計大尉が話を始めました。話の
内容は前の晩に私が話したものです。しかし最後になっ
て「これは小島中尉の考え方である。投降するかしない

かみんな考えてよう。1時間与えるからその間に相談し
て決めなさい」と言ったのです。

私は彼が「これは小島中尉の考え方だ」と言った瞬間
にやられたと思いました。彼はきっと自己保身のために
そう言ったのだでしょう。人間土壇場になると自己保身し
かありません。しかし彼が私に話しかけなければ、我々
の投降はなかったかもしれない。そう思うと、主計大尉
は私に一つの大きな恩恵を与えてくれたのかもしれない
。

主計隊員は一斉に私の顔を見ました。かなり頭に来て
いるという感じでした。私は危ないと思い、別れてから
すぐ河原の四方が大きな石に囲まれている穴に入り、ピ
ストルを抜き出して覚悟を待っていました。すると
私の兵隊がやってきて、私どもは隊長と行動を共にした
いと返事をしてくれました。私の部下だけでもそう言
ってくれたので、ほっとしたと同時に私を縛っていた鉄
の鎖が音を立てて崩れ落ちていくのを感じました。そし
て自分の行動を自分のやり方で決めた誇らしさでいっぱ
いになりました。その時に仰ぎ見たルソン島の透き通る
ような綺麗な青空、これを私は一生忘れません。まるで
自分が吸いこまれるような本当に透明な青でした。そし
て山を下り西海岸へ出て白旗を上げて米軍に投降しまし
た。

●驚愕したアメリカの考え方

私は我々を取り囲んだアメリカ兵の姿を見て、たいへ
んなショックを受けました。我々日本は世界中の人を相
手に戦争をしたのかなと思つたのです。髪の毛が金色、
銀色、白、茶色、黒と様々で一人一人違うのです。それ
を見て本当に国際軍だと思いました。しばらくして私は
アメリカの兵隊に「君たちは一体誰のために戦っている
のか」と聞きました。「自分たちは国家のため、民族のた
めに戦っているのではない。我々は自分たちの自由で豊
かな生活を守るために戦っているんだ」これが彼らの答
えでした。当時の私にとって、これはたいへんショック
でした。それからハワイに送られましたが、その間に私
の受けた待遇は、いい意味で想像を絶するものでした。
私にサーを付けて答えてくれたり、アメリカの兵隊と全
く同じ食べ物や毎日を過ごさせてくれました。

もう一つ驚いたことは、原爆投下の時のことです。私
はその時収容所にはいましたが、私たちと一緒にあって終
戦運動をしたアルバート・ディーンというアメリカの中
尉が目を真つ赤にはらして私に一生懸命謝るのです。ア
メリカは大変むごい爆弾を日本に投下した、本当に申し
訳ないと言つてシクシク泣いている。また新聞を見ると、

片面ではきのこ雲の写真と原爆ができるまでの経過が書
いてある。もう片面は米軍の原爆投下に対する学者や宗
教家や科学者の猛烈な批判が載っていました。私は本当
にびっくりしました。戦争の真つ最中に自分の国の政府
や軍隊に対する批判が出ている。これがいわゆる民主主
義なのか。私は日本とは全く違う尺度を持つ社会がこの
世の中にあることに大きなショックを受け、いったい何
が違うのだろうかと思いました。

●個の確立こそが民主主義の大前提

以上、私の戦争体験を若干の感想を交えてお話ししま
した。私がこのような戦争の語り部活動を続けている理
由は、戦争によって物心ともに多大の被害を受けるのは
いつでもどこでも一般庶民であることを訴えるとともに、
その庶民の一人一人の賛同がなければ戦争ができない、体
制、つまり民主主義体制を作り上げなければ戦争を廃絶
することはできない、真の平和は確立されないと想方
からです。こういう考え方は二〇〇年以上前にカントが
「永遠平和のために」で書いています。
私は国家とは他の誰でもない私たち自身であり、民主
国家の基本的な原理である個の確立の大切さを自らの体
験を通じて全国に訴え続けています。トマス・ホッブス
は、人間にとつての最高価値を生命の尊重、自己保存と
定めて、自分の生命は自分で守るといふ自然権について
説く一方、各人が生き延びるために自然権を行使しよう
とすれば飢えなどの異常事態がおこったときには万人の
万人に対する闘争状態が起こるとも書いています。これ
はまさに私がルソン島の山の中で体験した戦場の実態そ
のものです。人間は自然権そのものを大事にしながらも、
生命の危険を招く闘争状態を防ぐために何らかの社会関
係を結ばなければいけない。そこで社会契約にもとづく
近代国家が必要だとホッブスは唱えました。自然権の行
使、自分を守るという考え方と、契約によって多数者の
共通権力を形成してお互いの共生をはかるという一種の
社会契約、この二つのバランスが崩れたときに暴力も戦
争も認められ、核兵器も使用されるのでしょうか。この二
つのバランスをどう考えていくか、どう守っていくかが
何よりも大切ではないでしょうか。軍備全廃や核兵器廃
絶を説くことも必要でしょうが、平和の基本的条件たる
民主主義体制を自らのものにするためには個の確立こそ
が大前提だろうと私は信じています。そして自分の社会
観、世界観を確立することが国境を取り払い、地球市民
への道に進む第一歩であると考えています。

委員会報告

平成10年度

第4回大学教員研修プログラム委員会

98年10月5日/アイビー・ホール

【出席者】 絹川正吉、井下理、佐々木一也、原一雄、山内正平、蟬山道雄、丹羽泉、清水一彦

【ハウス側】 佐野館長ほか企画室スタッフ3名

●主な議事

第16回大学教員研修プログラムの実施報告、第17回大学教員研修プログラムの企画、他。

平成10年度

第5回大学教員研修プログラム委員会

98年11月9日/アイビー・ホール

【出席者】 絹川正吉、井下理、小林志郎、亀山純生、佐々木一也、中田良平、福田一郎、宮腰賢、山内正平、蟬山道雄、丹羽泉、清水一彦

【ハウス側】 佐野館長ほか企画室スタッフ3名

●主な議事

第17回大学教員研修プログラムの企画、次年度の新委員候補について、FDハンドブック編集方法について、他。

平成10年度

第2回共同セミナー委員会

98年11月12日/アイビー・ホール

【出席者】 宇波彰、伊藤孝之、伊藤正直、野崎昭弘、松井孝典、小森陽一、長谷川眞理子、宮島喬、村上陽一郎、吉見俊哉、市村禎二郎、桐原保夫

【ハウス側】 企画室スタッフ3名

●主な議事

第177回大学共同セミナー「地球市民になる Part 2」、第16回大学院共同セミナー「カルチュラル・スタディーズ」の実施報告、第178回大学共同セミナー「科学と社会―環境・生命・物質―」、第179回大学共同セミナー「みえざる社会問題にどう迫るか」、第1回土曜セミナー「知られざるマルチナウ」の準備状況、次年度の企画について、他。

平成10年度

第2回大学教員懇談会企画委員会

98年12月14日/アイビー・ホール

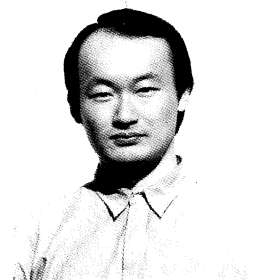
【出席者】 平野健一郎、秀島武敏、松山正男、高倉翔、梶谷誠、吉川政夫、北原和夫、田邊和子、並河一、西川孝夫、安田忠郎、山本和、山本眞一、上山民栄、坂本鶴男、建部正義、古田元夫、松本隆

【ハウス側】 佐野館長ほか企画室スタッフ3名

●主な議事

第35回大学教員懇談会の報告、第36回大学教員懇談会の企画、他。

ひとこと



よく晴れた休日、用事もなければとりあえず車で出かける。行先は走り出してから、思い浮かんだ場所に向かう。ここではそのような「私の好きな場所・冬版」の中から1カ所を紹介します。冬ならではの星空を満天余すところなく堪能できるその場所は、三浦半島の先端、城ヶ島灯台。周囲が海なので人工の光の影響を受けないのです。城ヶ島大橋を渡り、ループ状に道をくだって、まっすぐ行けば突き当たりが無料駐車場。灯台へは標示に従い歩くこと2〜3分、小さな丘に階段で登る。こじんまりとした、昼間にはわざとらしく感じるであろう白を基調とした洋風のたたずまいだが、夜の闇につつまれると白々と浮かび上がり、何ともシヤレた雰囲気をかもし出す。

(及川哲史・総務課)

花ごよみ セミナー・ハウス キャンパスの植物



ハウスキャンパス内の「梅小路」をご存知ですか。本館から交友館へまっすぐ伸びている道の左側、中央庭園の一角に白梅・紅梅・しだれ梅など、様々な梅の木があり、満開の頃は見事な景観です。また、遠来荘（茅葺きの民家）の庭の梅の木は昨年の大雪で枝が折れて心配されましたが、幸い手当が良かったようで、今年も可憐な花を咲かせてくれそうです。2〜3月頃が見頃です。是非お出かけ下さい。

千人会

98年10月〜12月

◆ご入会ありがとうございました

- ◇佐藤 光殿 大阪市立大学教授／C
- ◇篠木昭夫殿 (社) 全国都市清掃会議／C
- ◇坂本光一殿 /C
- ▼会員数 1390名

◆会費ありがとうございました

- 長松昭男、久武雅夫、東壽太郎、今井淳、末松安晴、永井克孝、小林善彦、矢吹晋、天利長三、八木江里、池上秋彦、塩見利夫、加藤一郎、神田信夫、板垣與一、平野敬一、新田悟、田村献、松岡八郎、柳下綱道、平野健一郎、小和田恒、川原栄峰、森玲子、荒川幾男、青柳清孝、末岡俊二、森田明、貝塚爽平、酢屋善元、江藤一洋、高橋三郎、福田隆義、堀光男、宮野彬、遠藤卓郎、清水護、戸田盛和、江尻美穂子、篠崎啓助、秋田成就、松田千鶴子、田島澄江、木村富夫、森岡清美、岩下秀男、鶴岡義一、赤木愛和、太田時男、田村皖司、鬼塚宏太郎、斉藤孝、久留都茂子、牧内操、小田滋、伊藤玄三、森田信義、山本よしる、米満澄、木畑洋一、藤林宏一、井関利明、山岸健、宮田登、松尾章一、祖父江孝男

久場嬉子、戸張よし子、奥田眞丈、小林澈郎、熊川忠、山下幸夫、國分康孝、伊藤修、八戸信昭、篠沢公平、飯野利夫、笹島恒輔、斎藤信房、外池孝雄、若林俊輔、太幡祐己、梶木隆一、宇野重昭、近藤保、岡村浩、村上健、小松八郎、稲垣寛、田村光三、木下是雄、戸田三三冬、末永國明、松平文朗、福井憲彦、増田義男、岡惺治、青木生子、納富照枝、矢澤修次郎、市川節子、隈部直光、池川郁子、今井哲哉、尾田幸雄、外間寛、城謙輔、平松幸一、慶伊富長、徳座晃子、扇谷尚、池田温、松本幸一、桐原五十鈴、上田和宏、茂木誠陸、生山智己、澤孝一郎、吉田豊、有山正孝、金台焦、濱川祥枝、大島葉子、横山実、竹内啓一、小西正捷、横沼健雄、渡辺恭章、山田圭一、三浦安子、八杉貞雄、吉武泰水、川端香男里、有馬弥子、篠木昭夫、三戸公、合田信子、塚本利明、新城信枝、福原満洲雄、青柳総太郎、中西治、茂木利一、須田精二郎、石田孝夫、井上宇市、鈴木順子、斉藤耕二、滝口亨、大口勇次郎、師岡孝次、渡辺忠胤、京藤哲久、川崎正三、松澤正夫、高野雄一、上山碩

●岡先生のご残念ですが、かなしみをこえて、セミナー・ハウスと千人会が充実発展することを祈ります。
(津田塾大学教授・東壽太郎)

●本年3月末で学習院大学を停年退職し、4月からは日仏会館の常務理事として毎日会館にいて、日仏の学術・文化交流の仕事をしております。
(小林善彦)

●誕生日のお祝いありがとうございました。厚く御礼申し上げます。大学セミナー・ハウスの大学教育への御貢献に対して心から敬意を表します。私は相変わらず元気で研究と趣味の生活を続けております。一層の御活躍を期待致しております。
重大なる国の秋にしてわが心ななに疲れて睡るとすらむ 南原繁先生「形相」より
(東洋大学教授・松岡八郎)

●10月初めに国連から帰国しました。今後もよろしくお願いたします。
(国際連合日本政府代表部・小和田恒)

●お便りありがとうございました。何時も乍らのお心遣いに感動しております。千人会にお世話になり30年を過ぎました。現在は現役を退き読書と散策に時間を過して居ります。会費をお送り致します。今後ハウスの益々のご発展・充実を祈念致します。
(阿部産業KK・柳下綱道)

●誕生日のカードお送りいただきましてありがとうございました。この数か月さぞお疲れでして、かつ神がそれを良きに導き給うと信じております。
(三菱化学生命科学研究所所長・永井克孝)

ウスの御発展を心より祈っております。

(東京都立立川高等保育学院・森玲子)
●元気で忙しくしております。ハウスをまた利用させていただこうと思っております。
(東洋大学教授・堀光男)

●今年も心暖まる誕生カードをいただき深く感謝いたしております。セミナー・ハウスのますますのご発展を祈り上げております。
(明治学院大学教授・宮野彬)

●相変わらず多忙な毎日を送っております。今年の後期はサバティカルなのですが、あちこち学会に出かけていますため、結構時間に追われているのです。
(津田塾大学教授・江尻美穂子)

●天と地の恵みにより今日の日を迎える事が出来感謝しています。9人の孫に恵まれ、平安の日々。今年のみA会員、悪しからず。近々老人ホームにコーラスグループで慰問に出かけます。見学をかねて、文化センターなどで老化防止の勉強にはげんでいます。
(田島澄江)

●馬齢を加え来年3月退職のため、お言葉に甘えC会員にさせていただきます。
(東京女学館短期大学学長・久留都茂子)

●去る7月6日「故岡宏子先生追悼記念会」に出席させていただきました。「沈む日は返らないけれど、輝きながら沈むんですよ」とは先生のお言葉だそうです。退職して5年、ここで設定された「もうひとつの教養」体現への自分の試みのごくささやかな輝きのうちに沈んでいくよう願って一日一日を過ごして

◆千人会員のオタよりから

●館長の御死去と、その特集「ニュース」を拝し、涙が止まりませんでした。空虚は大きく、かつ神がそれを良きに導き給うと信じております。

(三菱化学生命科学研究所所長・永井克孝)

います。(田村皖司)

●岐阜県立「国際ネットワーク大学」の仕事
しています。これは独自のキャンパスを持た
ないバーチャル大学で、わが国では初の事
業です。成功へむけ努力したいと思えます。

(横浜国立大学元学長・太田時男)
●2月に狭心症を患い2週間入院し、現在節
酒・禁煙しております。岡先生の記念会(1
周年)その他お知らせ下さい。

(創価大学教授・赤木愛和)
●青少年の頃ひよわだった小生、いつしか馬
齢を重ねて80年：傘寿のお祝辞のカードをい
ただいて感無量です。ありがとうございます
た。(早稲田大学名誉教授・鶴岡義一)

●今回で満65歳となります。これからもセミ
ナー・ハウスに参上したく存じております。
(法政大学教授・伊藤玄三)

●お誕生日のカードを有難うございました。
お蔭さまで元気にすごしております。
(財団法人生物学研究所・戸張よし子)

●パースデイ・カードを有難う存じました。
9月はスウェーデンに出かけており、送金致
すのが大変遅くなりました。
(東京学芸大学教授・久場嬉子)

●またゼミ合宿で利用させていただきました。
よろしく願い申し上げます。いつも誕生日
の素敵なカード深謝いたします。
(法政大学教授・松尾章一)

●岡宏子先生のお姿を思い浮かべておりま
す。セミナー・ハウスの発展をお祈りいたし
ております。(慶應義塾大学教授・山岸健)

●去る4月1日より声屋大学学長に転任しま
した。(奥田眞丈)

●昨(一九九七)年度から拓殖大学(外国語
学部)教授となりました。大学院言語教育研
究科英語教育学専攻コースの主任をつとめて
います。修士課程ですが、来(一九九九)年
度には博士後期課程(言語教育学専攻)が発
足する予定です。(若林俊輔)

●誕生日カードありがとうございます。私は
3年前からは、いずれの組織にも属さず、全
くのフリー、24時間とも誰の制約をうけるこ
となく、全く自由。しかもそれなりに、「自
主管理」の必要性を痛感しております。
(駿河台大学教授・飯野利夫)

●ハウスに人と人のふれあいの風土がいつま
でも続きますように。
(聖徳栄養短期大学・国分康孝)

●今年3月をもって東京中央郵便局を定年退
職いたしました。私は大学人ではありません
が、若き日から高橋聖書集会が大学セミナ
ー・ハウスを使用させていただいて行なっ
て来た聖書講習会に参加して学んで来たこと
によって、大学セミナー・ハウスは私の生涯に
とって重要な学びの場であったことを思い、
感謝の思いを深くいたしております。
(熊川 忠)

●誕生日のカード有難うございました。毎年
頂いた岡先生のお美事な筆跡のお心こもった
添書きを改めて懐しく思い起こしております。
大学受難の時代であります。セミナー・
ハウスの存在にかける期待は大きくありま

す。現役時代の仕事の何分の一かではありま
すが、「老学則死不朽」を願って歩いていき
たいと存じます。
(福井工業大学教授・小林澈郎)

●岡宏子先生がおられないとやはり寂しく感
じます。亡くなられた方も含め、千人会の名
簿を作ってみるのはいかがでしょうか。歴史
を振り返り、また新しい連帯感が生まれると
思いますが。
(成蹊学園専務理事・宇野重昭)

●誕生日のカード有難うございました。余生
を心静かにおくついています。(小松八郎)

●どうにか元気で76回目の誕生日を迎えま
した。久しくお訪ねしませんが、セミナー・ハ
ウスのご繁栄を祈念いたしております。
(文教大学教授・末永國明)

●昨年の秋から、今年の秋にかけて、著作集
全12巻をどうやら完結しました。人生の店仕
舞をさせられた感も残りますが、まだ何かと
ヤボ用に追われております。館長先生はじめ
皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます。
(日本女子大学名誉教授・青木生子)

●少額で心苦しいのですが貧者の一灯という
気持だけご受納されれば幸甚です。会のます
ますのご発展を祈りつつ。
(増田義男)

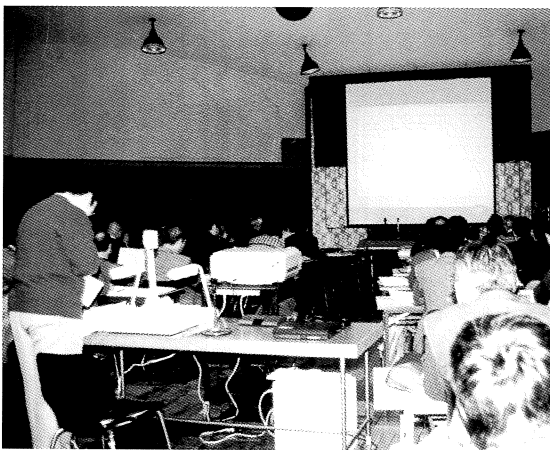
●同じ八王子内の創価大学文学部に勤務して
おりますが、何かと雑務に追われ、セミナー
・ハウスも久しくご無沙汰しております。皆
様のご健勝とセミナー・ハウスのご発展を念
じます。
(東京大学東洋文化研究所・池田 温)

●本年3月北陸先端科学技術大学院大学を退

ありがとうございました

—— オーバーヘッドカメラ ——

セミナー・ハウスでは皆様のお役に
立つよう努力していますが、なお充分
ではなく、御不便をおかけしているか
と思います。この程、寺尾健吾様から
岡宏子前館長の追悼をかねて寄せられ
た寄付金により、オーバーヘッドカメ
ラを購入致しました(写真)。液晶ビ
ジョン、テレビモニターを接続しての
画像表示、パソコンへの入力もできま
す。ここに厚く御礼申し上げますと
もに、広く皆様にも目的に応じたご利用
を戴きますようご案内申し上げます。



職いたしました。学長職を無事了えることが出来ましたのも多くの皆様のご支援のおかげと感謝いたしております。
（慶伊富長）

●誕生日カードを有難うございました。お蔭さまで今年も無事あらたな誕生日を迎えることができそうです。ここに些か乍ら会費をお送りすると共に、ハウスの一層の御発展をお祈りいたします。
（濱川祥枝）

●元気で駒澤大学に勤務しています。また5月はじめに学生をつれてまいります。
（竹内啓一）

●おかげ様で健勝に“還暦”をむかえました。思えばその半分に近い年月にわたり貴ハウスにお世話になってきたことを感謝しております。
（立教大学教授・小西正捷）

●クリスマスと新年に豊かに主の恵がありま様に祈ります。
（日本同盟基督教団椎名町教会・渡辺恭章）

●しばらく伺っておりませんが、又是非お訪ねしたと思います。60代―自らも尚励み、若い方々から学びつつ一日一日を静かに歩んでまいりたいと思います。皆様の御平安をお祈り申し上げます。
（東洋大学教授・三浦安子）

●飯田宗一郎先生の御健祥、貴セミナー・ハウスの御発展をお祈りいたします。三戸ゼミの木のお手入れ有難うございました。
（立教大学名誉教授・三戸公）

●ますますの御発展よろこび申しあげます。ささやかなお会費お恥ずかしく存じますが、お送り申しあげます。

（合田信子）

●篠田節子氏の昔の写真やセミナー・ハウスについて書かれた文章を見て、女性問題のゼミで一緒に書いたのを思い出しました。小生も「大学に不満を持っていた人」というところですが、10年後に再会しようと思つて住所録を作りましたが、とりまぎれてそれっきりになりました。少しはお役に立てるかもしれませんが。住所録は残っています。
（主婦の友社販売本部・青柳総太郎）

●大変遅くなってしまい申しわけございません。岡宏子先生の“お別れの会”には是非出席させて頂きたかったのですが、所用のためかないませんでした。先生の美しい文字“不在”のカードで先生のお励ましのことばにどんなに力を与えられていたかを知りました。
（大東文化大学教授・鈴木順子）

●つつがなく年を加えることの大切さ、難しさをしみじみ考える年齢になりました。
（日本女子大学教授・川崎正三）

「ご生前のご厚情に感謝し
謹んでご冥福をお祈りいたします」

岩崎代志治氏（元東京農業高級研究所所長、98年10月2日没。79歳）70年代には東京大学農学部との合宿で利用され、80年代には大学教員懇談会にも参加された。72年以来の千人会員。

佐藤教氏（元一橋大学教授、97年10月8日没。

65歳）法政大学在職中、共同セミナー委員として第43回大学共同セミナー「人間解放―サイコパソロジーカルアプローチ―」（71年）の運営委員を務め、ご自分のゼミでも来泊された。74年以後の千人会員。

藤野登氏（元専修大学教授、98年9月15日没。78歳）69年以後ご芳志をお寄せ下さった。

川口弘氏（元中央大学教授、98年10月11日没。84歳）第62回大学共同セミナー「現代資本主義の諸問題」（73年）の指導教授を務め、ご自分のゼミ合宿でも利用された。68年以後の千人会員。

鞍馬菊枝氏（元都立三田高校教諭、基督教友会会員、98年11月23日没。89歳）飯田宗一郎名誉館長と同信の友会徒として68年以後30年間ハウスの活動を支援された。クエーカー文献の翻訳書がある。

池田貞雄氏（創価大学教授、情報科学研究所

長、98年11月9日没。70歳）68年以後ご芳志をお寄せ下さった。

寄贈図書

98年10月～12月

『アジアとの対話 第5集』『二垣会誌』

『送配水システム解析入門』

『大学の自己変革とオートノミー』『大学評価の理論と実際』

『心の掛橋』

『神奈川大学創立70周年記念論文集・随想集』

『京都市百年史・総説編』

『やまなし〜光と風と山と〜』

『送配水システム解析入門』

『大学の自己変革とオートノミー』

『心の掛橋』

『神奈川大学創立70周年記念論文集・随想集』

『京都市百年史・総説編』

『やまなし〜光と風と山と〜』

板垣興一殿

鬼塚宏太郎殿

東信堂殿

小幡史朗殿

神奈川大学殿

京都大学殿

上野敦男殿久

千人会 ― 大学セミナー・ハウス維持会のご案内 ―

●千人会入会のおさそい

大学セミナー・ハウスは、国公私立大学の連帯を中核として設立された財団法人組織の教育施設ですが、経営的には特別な財政基盤を持たない民間事業です。

事業は利用の方々の使用料、国・公・私立大学の協会会員の会費、文部省の補助金などに基づいて運営されています。そのほかにも当ハウスの理念をご理解下さっている方々の寄付金に助けられています。とくに「千人会」は個人の寄付金を継続していただくことを目的として設立された維持会です。大学セミナー・ハウスでは広く大学人や社会人の方々に千人会の趣旨にご賛同下さりご参加いただければと期待しております。

●会費の種別

A：年額一万円／B：年額五千円／C：年額三千円／終身会員：一時払十万円

●払込の方法

- ①誕生日献金としてご寄付いただいております。会員の方の誕生日2週間前頃に払い込み用紙お送りします。
- ②その年のご事情により、金額を変更あるいは中断いただいてもご随意です。
- ③終身会員制を設けました。還暦や定年などを記念してお入り下さい。

●千人会の名称の由来

八王子には徳川幕府のために奉仕した千人同心という徳川直臣団がありました。それに因んで、大学セミナー・ハウスの維持運営に役立つようにとハウスの設立初期に有志の会が設立され、「千人会」と名付けられました。

業／務／通／信

第3・四半期は、例年他の四半期と比較して利用者が少なくなるが、今年度は、この四半期期だけを見ると、延べ利用者数は五、七八六（昨年五、三七九）人で、昨年と比較して8%程度の微増となった。▼団体別でみると、会員校を除いて、非会員校、学術・教育団体、企業社会人団体がそれぞれ4%、22%、15%増加した。月別で見ると、10月は24%、11月は5%の増加、12月は3%の減少となった。▼十月九日～十日にご来館の山梨学院大学教授上野敦男ゼミナールは、「スポーツの実践と科学」をテーマに掲げて学習されているが、この度、指導の上野教授が体育功労賞を受賞されたとのこと。常にこのゼミ合宿に同教授とともに引率される海老沢信一氏のご寄稿下さった。▼十月二十三日～二十七日の五日間にわたって第四回バードライフインターナショナル・環境NGO東京国際会議が開催された。来秋にマレーシアで予定されている世界大会に向けての準備会とのこと。主催した日本野鳥の会・国際センターの沈初蓮さんに同会をご紹介いただいた。▼学期中にもかかわらず、十一月二十日～二十二日にかけて卒論合宿された一橋大学教授石弘光ゼミナールの高山知也さんには、石ゼミの学習内容や方法などについてご紹介していただいた。

わたしたちの合宿①

卒論合宿で相互理解と将来にわたる交友関係を築く

一橋大学経済学4年 高山 知也

十一月二十日～二十二日にかけて、我がゼミナールは、ゼミナー・ハウスの国際ゼミナール館で恒例の「卒論合宿」を行なった。実際に私がこのゼミナー・ハウスを使用するのは初めてであったが、我がゼミナールは例年四年生が十一月に「卒論合宿」と銘打った合宿をゼミナー・ハウスで開いており、今年もその季節を迎えたのであった。

我がゼミナールでは、三年生の夏学期までは、財政学の原書を輪読し、原書へのアプローチの仕方、財政学の基本的なエッセンスを学習した後、夏休み以降は関心を有する分野から研究テーマを定め、研究の核とすべき原書を選択、その内容の完全理解が要求される。三年生の冬学期のゼミナールからはいよいよプレゼンテーションが始まる。すなわち各自が選択した原書について理解した内容を三〇～五〇ページ程度のレジュメにまとめて、約一時間四〇分という枠内でプレゼンテーションを行なうのである。他のゼミテン（ゼミナールのプレゼンテーション）は一週間前に配布されるレジュメに目を通し、疑問点・あいまいな点などについてプレゼンテーション後に質問していくのである。このプレゼンテーションは四年生の夏学期終了時まで続くので、約一年間多い人で計四回のプレゼンテーションを行なってきた。

以上が我がゼミナールの基本的な活動内容であるが、この「卒論合宿」ではプレゼンテーション時にインプットされた知識を



石弘光教授（後列右から三人目）と高山知也さん（後列右から二人目）とゼミの皆さん——本館前にて

元にして、どのようにアウトプットしていくか、ということが中心的議題となった。すなわち、どのような問題意識に基づいてアウトプットしていくのか、またどのような章立てでアウトプットしていくのか、これは換言すれば、プレゼンテーションを行なった内容を

ら何をアウトプット用として選択し、何を捨てるのかということ等を皆で議論した。各自卒論合宿用のレジュメを前もって作成し、一人一時間という枠内で大学生活「最後の」プレゼンテーションをこの卒論合宿で行なった。他のゼミテンはその内容を把握して、少しでもあいまいな点、不明確な点、改善すべき点などについての指摘が相次ぎ、白熱した討論になった。

この合宿での討論を通して、卒論の方向性がきわめてクリアになったゼミテンが多かったようである。もともと「経済学は輸入学問であり、その原書の完全理解をはかることが最優先」であり、「立派な卒論を仕上げる」ということが、我がゼミナールに課された至上命題であるので、この合宿は我がゼミナールにとってこれ以上なく有用なものであった。

また三日間という短い期間ではあったが、緑と木々に囲まれたすばらしい環境の中で、ゼミテンと寝食を共にして、卒論についての討議のみならず、実にさまざまなことについて夜通し語り合うことができた。改めてゼミテン同士の相互理解を深めることができたし、また今後の社会人としての生活においてもきわめて深い交友関係を続けていくことができると強く実感することができた。この三日間で得たものは本当に計り知れない。来年も四年生が同じ時期に何うことになるかと思いますが、よろしくお願い致します。

「スポーツの実践と科学」をテーマに7年

—文部省体育功労賞受賞の記念となった合宿を終えて—
山梨学院大学入試センター主任 海老沢 信一

1年を3回に分けて、「スポーツの実践と科学」をテーマに学習するこのゼミが、ここ大学セミナー・ハウスを利用しはじめてから、今年で7年近くにもなります。

高齢化社会や健康の問題が国民的な関心事となつています。「生涯学習」「生涯スポーツ」が脚光を浴びて、その役割は年々多大なものになっていきます。健康で安心できる環境づくりのため、そして都市問題や公害対策といったものが渦巻くなかにおいて、人間が人間らしく生活するために、スポーツ活動は不可欠ではないでしょうか。

生涯学習・生涯スポーツに関心を寄せる人が多いにも拘わらず、調査では費用の高さや活動する場所の整備不足、信頼できる指導者不足などの理由によって、実際には行動を控えている人が多いのも現状であり、行政側ももっと力を入れてほしいものです。

今年10月9日、我が師「上野敦男先生」は永年の功績により文部省から体育功労賞を受賞。当日は、文部省の授賞式から大学セミナー・ハウスへ直行されてのゼミ合宿となりました。ゼミの最後には受賞の報告がなされ、全員に記念の銀杯と表彰状を披露。お祝にと、ゼミ員から拍手の中、贈り物が手渡されると、先生も目頭を熱くして感謝され、いつにない祝賀ムードでいっぱい、の思い出深きゼミでした。



上野敦男教授（正面中央）とゼミの皆さん——記念館セミナー室にて

私の国際交流

アジア各国から野鳥を愛する人々が集う

財団法人日本野鳥の会国際センター 所長アシスタント 沈 初蓮

98年10月23日～27日にかけて大学セミナー・ハウス国際セミナー館で、「第4回バードライフインターナショナル・環境NGO東京国際会議」が開催されました。バードライフインターナショナルは環境、鳥類保護に関わる世界のNGOが加盟している、世界的にも最大の規模を誇る野鳥保護を主とした自然保護組織です。

本部はイギリス・ケンブリッジにあり、世界主要地域には地域事務所、各国には代表団体が加盟して、バードライフのネットワークを通じた野鳥保護に関する情報交換、渡り鳥保護プロジェクトなどの共同事業を展開しています。アジア地域には現在アジア11カ国の団体が加盟している「バードライフ・アジア地区委員会」があり、日本唯一の代表団体である（財）日本野鳥の会がアジア地区の中心としてアジアのネットワーク強化に努めています。

今回の会議では1999年秋にマレーシアで開催予定のバードライフ世界大会に向けて、アジア地域での近況活動報告、来年に向けての課題目標の設定などを主旨とした準備会合を開催しました。参加国は11加盟団体（日本、タイ、ベトナム、フィリピン、ロシアなど）に加え、アジア地域で活動しているその他5カ国（インド、中国、韓国など）、計16カ国約40名の代表者が参加いたしました。それに加え、世界各地域で活動している15名の理事による「バードライフ世界理事会」も同時開催され、アジア地域代表者と世界理事間の交流がより一層深まり、今後の活動においてもよい機会となりました。

会議では前期バードライフアジア地区委員長の基調講演を皮切りに、各国団体による近況活動報告、共同事業である絶滅危惧種保護プログラム（レッドデータブック作成）、野鳥を指標とした重要自然環境調査（IBAプロジェクト）、ツル保護ネットワークなどの協議および今後のアジア地区での活動課題、特に今後アジア地域保護団体の

ネットワーク強化についての協議が盛んに行なわれ、参加者全員が積極的に意見を発表し、アットホームな雰囲気の中、活気に満ち溢れた会議となりました。



また来年の世界大会に向けて、バードライフが考案したPR戦略「グローバルキャンペーン」や21世紀に向けた活動方針「バードライフ2000」の発表もあり、バードライフインターナショナルの将来展望について明らかになりました。

会議初日には歓迎パーティーが本館食堂で行なわれ、バードライフ本部事務総長マイク・ランズ氏（写真・左上）の歓迎スピーチ、アジア地区委員長・日本野鳥の会国際センター所長・市田則孝（写真・右下）の祝辞のあと、東京純心女子大学講師の保田由子先生の素晴らしい歌声、江戸家子猫さんの鳥の鳴き真似も披露され、楽しいひとときを過ごしました。また、晴天に恵まれた25日には会議中のエクスカージョンとして、地元で活動を続けている八王子カワセミ会のメンバーの案内による高尾山と浅川の探鳥会に出かけ、日本の紅葉とバードウォッチングを楽しみました。



会議最終日の27日には、経団連会館にて「助成団体—NGO円卓会議」が開催されました。この円卓会議は、今回の会議での成果を日本の助成団体および関連NGOに発表し、バードライフの活動を広く紹介すると共に、お互いの交流を深めるための会議で、バードライフを代表してインドネシアプログラムオフィスのルディアント氏、フィリピンのアルドリン・マラーリ氏によるバードライフの活動を紹介したショー“Challenge for the future”が上映され、助成団体を代表して外務省、環境庁、環境事業団、経団連の各プレゼンテーションをいただき、その後の意見交換会では助成団体とNGOとの間の意見交流が行なわれ、今後の活動に対する支援を呼びかけることができました。

最後に、本会議が縁に囲まれた大学セミナー・ハウスで開催されたことは、野鳥を愛するバードライフの会議に適しており、参加者全員にとっても好評で、次回も是非ここで！という声をたくさん耳にしました。事務局担当としてはこの上ない喜びです。

●連絡先：（財）日本野鳥の会・国際センター TEL：0426-593-6871



←会議中のエクスカージョンとして、地元で活動を続けている八王子カワセミ会のメンバーの案内による高尾山と浅川の探鳥会に出かけ、日本の紅葉とバードウォッチングを楽しんだ参加者の皆さん。

利用状況

98年10月～12月
* 11月2回利用
日帰りを除く

- 10月(34グループ、延一、七七二人)
 - 一橋大学教授 奥田 英信
 - 千葉大学教授 嶋津 格
 - 東京理科大学教授 志水 英樹
 - 東京学芸大学助教授 浅沼 茂
 - 学習院大学フランス会部 順天堂大学第33回病院業務改善セミナー 高野 英彦
 - 武蔵工業大学教授 杏林大学教授 中央大学学生相談室 中央外国語大学教授 早稲田大学教授 早稲田大学コンツェルト 伊藤 あり
 - 立教大学教授 共立女子大学助教授 東洋英和女学院大学木村・慶應義塾大学山田・阿部 圭子
 - 慶應義塾大学教授 中央大学横山合同セミナー 国分 良成
 - 東京理科大学教授 狩野 紀昭
 - 武蔵野美術大学教授 山梨学院大学教授 源 愛日児
 - 北海道レスリング団体チーム 上野 敦男
 - 恵泉女学園大学助教授 川島 堅二
 - 名古屋造形芸術短期大学助教授 岡田 憲久
 - 第177回大学共同セミナー ユナイテッド・ペンテコステ教会 日本野鳥の会 東京キリストの教会 日本野鳥の会国際センター ヒューマンライフセンター リアル化学 小松ゼノア CSS

- 明治大学教授 古屋野素材
- 桜美林大学教授 藤田 慶喜
- 日本女子大学教授 住沢 博紀
- 早稲田大学講師 沖田 裕生
- 東京電機大学教授 八木澤壯一
- 千葉大学教授 藤井 良治
- 桜美林大学助教授 岩城 淳子
- 埼玉大学助教授 加地 大介
- 一橋大学助教授 石 弘光
- 学習院大学教授 小谷 正博
- 早稲田大学助教授 後藤 春彦
- 法政大学助教授 菅沢 龍文
- 中央大学助教授 野澤 紀雅
- 中央大学助教授 齊藤 知巳
- 日本女子大学講師 遠藤 知巳
- 法政大学教授 松尾 章一
- 中央大学教授 菅原 彬州
- 日本大学映画研究所 学習院大学助教授 米山 正樹
- 学習院大学助教授 小塩 和人
- 日本女子大学助教授 大月短期大学教授 江波戸 昭
- 中央大学教授 石崎 忠司
- 中央大学教授 村越 洋子
- 玉川大学附属高等学校 山口 栄一
- 横浜市立大学助教授 和仁 道郎
- 東京神学大学全学修養会 横濱市立大学助教授 創価大学インター・セミナー合同研究大会 現象学解学研究会 第25回国際学生セミナー 第19回社会学合同セミナー 日本小児神経学会 ルソール合奏団 日本建築家協会 日本精神科看護技術協会東京都支部 からだところの出会いの会 語り手たちの会 日本長老教会 心理社会学する会 ガラス教育者の会 教育春秋社著漢塾* 日本POP広告協会 アネくらむ

- 法政大学助教授 福井 秀夫
- 武蔵大学助教授 川島 浩平
- 日本大学教授 豊田 彰
- 明治大学教授 久保田義喜
- 日本大学生物資源科学部体育部連盟 河合 秀和
- 学習院大学助教授 中條 献
- 桜美林大学助教授 山川 仁
- 東京都立大学助教授 平澤 茂一
- 早稲田大学助教授 野間 竜男
- 早稲田大学助教授 片山 寛
- 東京理科大学卒業設計ゼミ 有馬 賢治
- 立教大学助教授 豊田由貴夫
- 立教大学助教授 お茶の水女子大学・東京外国語大学合同ゼミ 豊田 宏一
- 一橋大学助教授 東京外国語大学助教授 今井 昭夫
- 立教大学助教授 立教大学助教授 庄司 洋子
- 早稲田大学助教授 早稲田大学助教授 安原 健允
- 日本大学助教授 早稲田大学助教授 古田 智久
- 東京外国語大学リーダーシップトレーニング 中村 真人
- 東京女子大学助教授 栗原 彬
- 立教大学助教授 千原 洋
- 杏林大学助教授 遠藤 和義
- 工学院大学助教授 吉田 俣郎
- 立教大学助教授 村上 和夫
- 中央大学助教授 園田 茂人
- 明星大学通信教育部 溝淵一真
- 東洋大学講師 吉田 襄
- 山梨学院大学助教授 山梨学院大学助教授 自治医科大学助教授 加藤 直克
- 山梨学院大学小山ゼミ・横浜国立大学三戸ゼミ 松本 洋一
- 合同勉強会 秋山 哲一
- 東洋大学助教授 都内研究会 東洋大学助教授 アジア法学生協会 第178回大学共同セミナー 日本オオタカネットワーク 日本ポロイスカウト東京連盟杉並地区 FRIIC国際理解教育センター 国際学生シンポジウム AITC 元杉野女子大学教授 田村 皖司

開催予告

●第179回大学共同セミナー
社会学入門 みえざる社会問題にどう迫るか
99年3月12～14日(金～日の2泊3日)
◆特別講義
文化と不平等
◆セクシオン演習
立教大学社会学部教授 宮島 喬

A みえざる環境問題と環境リスク 長谷川公一
東北大学文学部教授
B 世代間階層移動と結果の不平等 鹿又 伸夫
北海道大学文学部助教授
C みえざる社会問題/見たくない社会問題 としての性差別 牟田 和恵
甲南女子大学文学部助教授

D 労働市場の中心と周辺 上林千恵子
法政大学社会学部教授
E 社会学論への今日的要請 西原 和久
武蔵大学社会学部教授

●募集人員・約70名 ●対象・国公立大
学、短大に在籍する学生学年、学科を問わ
ない(および社会人) ●参加経費・一二、〇
〇〇円(社会人は一五、〇〇〇円) ●申込締
切・3月4日(木) ※定員に達しない場合は
締切り後も引き続き申し込みを受け付けま
すので、お問い合わせ下さい。

●お問い合わせ先・大学セミナー・ハウス企画室
TEL:0426768532
TEL:0426768532
FAX:0426760266
E-mail: iush-kikaku@mnb.biglobe.ne.jp
http://www.mesh.ne.jp/iush/

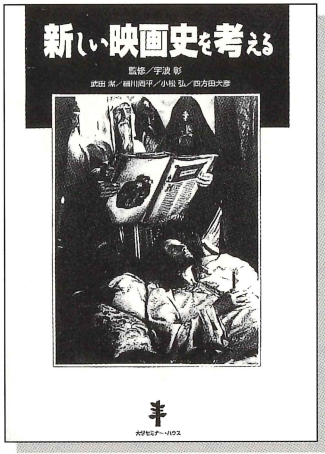
出版物のお知らせ

大学セミナー・ハウスブックス①
『新しい映画史を考える』
●98年12月19日発行 ●四六判・215頁・定価
一、五〇〇円(送料込み)

監修／宇波 彰／武田 潔／細川周平／小松 弘／四方田犬彦 共著

97年6月13日～6月15日(2泊3日)に開催された第17回大学共同セミナー『新しい映画史を考える』が本になりました。セミナーは、鋭い問題意識を持つ講師の先生方の熱のこもった発表と、文字通り「新しい映画史」を求める参加者の熱意に支えられ、非常な盛り上がりを見せました。セミナー当日の発言の他に講師の先生方が論文も加えて下さり、この本はさらに充実した内容となっています。当日ご参加の方はもちろん、映画に興味がおありの方にはお勧めです。図書館ならびに本館1階フロントにて販売していますので、ご来館の折に是非お求め下さい。郵送もいたします。

●ご注文は…大学セミナー・ハウス企画室まで
TEL…0426-76-8532
FAX…0426-76-0266
E-mail: iush-kikaku@mub.biglobe.ne.jp



出版予告 (3月下旬発売予定)

新版FDハンドブック(仮題)

目次・執筆者紹介
〈第1部 FDハンドブック〉

FD(Faculty Development)とは何か

第1章 これからの大学教育に期待するもの

第2章 教師の教育機能をどう考えるか

第3章 よい授業とは何か

第4章 シラバスの意味と機能

第5章 授業の成果をどう評価するか

第6章 授業評価と教員評価

第7章 求められるFDの努力

第8章 国際政治学

第9章 演劇学

小林志郎(東京学芸大学副学長)の授業論

10 「数学」の授業論

11 「よい授業」とは何かー総論

資料・解説編

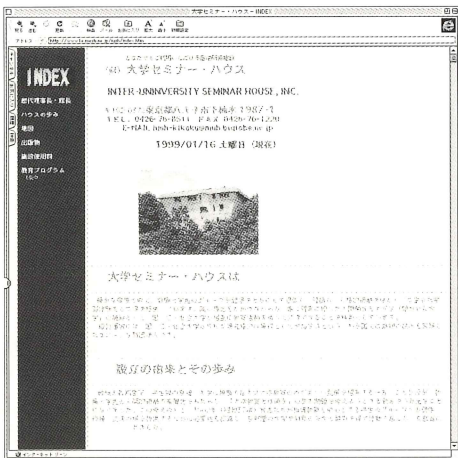
清水一彦(筑波大学助教授)

ホームページを開設しました

大学セミナー・ハウスもインターネットのホームページを開設いたしました。主な内容は、ハウスの歩み、交通案内図、出版物、施設使用料、教育プログラムの開催予告などで、常に最新の情報をお届けする一方、ご意見やプログラムの参加のお申し込みもお寄せいただけるようにいたしました。どうぞご覧下さい。

ホームページ: <http://www.mesh.ne.jp/iush/>
●お問い合わせ先
大学セミナー・ハウス企画室

TEL…0426-76-8532
FAX…0426-76-0266
E-mail: iush-kikaku@mub.biglobe.ne.jp



館長室から

大寒のさなかであるが、気がつくとも葉を落とした広葉樹の枝々には固い衣に包まれて沢山の芽が顔を出している。対生や互生の違いはあるが、将来どれがどのような花を咲かせ葉を繁らせるかは素人にはすぐには判別も難しい。

この季節は大学でも入学試験の時期であるが、大学セミナー・ハウスにも、日本の各大学への入学を目指して今年もマレーシアから数十名の受験生が滞在しているし、日本の受験生の宿泊申込みもある。これらの若い希望に満ちた、そして幾ばくかの緊張と不安の表情は、寒中の木々の固い芽を思わせる。

このニュースがお手元に届く頃は、立春を迎え、日差しは日一日と増し、やがて春の雨とともに、それぞれの芽は思い思いの成長を始めるに違いない。早く花を咲かせるものもあれば、秋口に漸く花開くものもある。また、花や実が目立たなくとも、豊かな葉を繁らせて背丈を伸ばす木々もあるはずである。若い世代がどのように育つかは予測すら難しいが、そこには限らない希望がある。

今年も大きい年輪を残す樹木の成長を願ひ、爽やかな陽光と潤いのある水のように、伝統あるハウスの行事や新しい企画などが教育にも役立つよう励みたい。(佐野)

表紙の写真は全国から参加者が集った「第17回大学教員研修プログラム」(平成11年1月23、24日)のセッション風景(講堂にて)

セミナー・ハウス

1998年10・11・12月分(年4回) 第153号

発行=財団法人 大学セミナー・ハウス
〒192-0372 東京都八王子市柚木1987
TEL 0426-76-8511 FAX 0426-76-1220
振替口座 00150-1-74590

発行人=佐野 博敏
編集=大学セミナー・ハウス企画室
制作=中山企画

SEMINAR HOUSE
The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House
No.153 (October~December, 1998)